神武東征

神武東征(じんむとうせい)とは、甲寅年(紀元前667年)日向国に住んでいた磐余彦尊が日向(ひむか)を発ち、大和を統治していた長髄彦を滅ぼし、辛酉年(紀元前660年)一月一日橿原宮で即位したという話である。今回は日本書紀・古事記の神武東征を確め、地名を検証する。

「神日本磐余彦の天皇、諱(いみな)は彦火火出見と申す。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の第四子にまします。母を玉依姫と曰す。…**日向(ひむか)国**の吾田邑の吾平津媛を娶して妃と為し給ひ…。塩土の老翁に聞けるに『東に美き地有り、青山四(よも)に周れり。其の中に天の磐船に乗りて飛び降る者あり』と曰しき。余(われ)謂(おも)ふに、彼の地は天つ業(ひつぎ)を恢弘(ひろ)くし、天の下に光宅(かがやか)なるに足りぬべし。蓋(けだ)し六合(くに)の中心(もなか)か。その飛び降りし者、謂ふに饒速日か。何ぞ就きて都せざらめや」と宣り給ひき。諸の皇子、對へ給ひしく「理實(ことわり)灼然(いやちこ)なり。我も亦恒に念ひと為しつ。宜(うべ)早に行ひ給へ」。是の年、太歳甲寅に次(やど)れりき。

其の年の冬十月丁巳の朔辛酉の日、天皇、親諸の皇子舟師(いくさ)を帥(ひき)ひて東征し給ふ。**速吸之門**に至りましし時、一人の漁人(あま)あり。艇(をぶね)に乗りて至りき。天皇招き給ひ『汝(いまし)は誰ぞ』と問ひ給ふ。對へて『臣(やっこ)は國つ神にして、名を珍(うづ)彦と曰す。曲(わた)の浦に釣魚せしに、天つ神の子来ませりと聞きて、故迎へ奉る』と申しき。『汝(いまし)能く我が為に導きせむや』と宣り給ひき。對へて『導きつかまつらむ』と曰しき。天皇勅して、漁人に椎棹の末を授けて、執らしめて皇舟に牽き入れ海導者(みをびき)と為し給ひき。すなはち名を賜ひて、椎根津彦と為し給ひき。此倭直部の始祖なり。行きて**筑紫国の菟狭**に至り給ひし時、菟狭の國造の祖、號を菟狭津彦・菟狭津媛と曰へるもの、菟狭の川上に一柱騰宮を造りて饗(みあへ)奉りき。是の時に勅して菟狭津媛を侍臣(まへつきみ)天種子命に賜妻(めあは)せ給ひき。天種子命は、是中臣氏の遠祖(おや)なり。

十有一月丙戌朔甲午日、天皇、筑紫の国の**岡の水門**に至り給ひき。

十有二月丙辰朔壬午日、**安芸国**に至りて、**埃の宮**に居み給ひき。

乙卯年春三月甲寅朔己未日、**吉備国**に移り給ひて、行宮を起てて居み給ひき。是を高島の宮と曰ふ。三年を積みし間に、舟檝(ふね)を備へ、兵食を蓄へて将に一たび挙げて天の下を平けむと欲(おも)ひ給ひき。

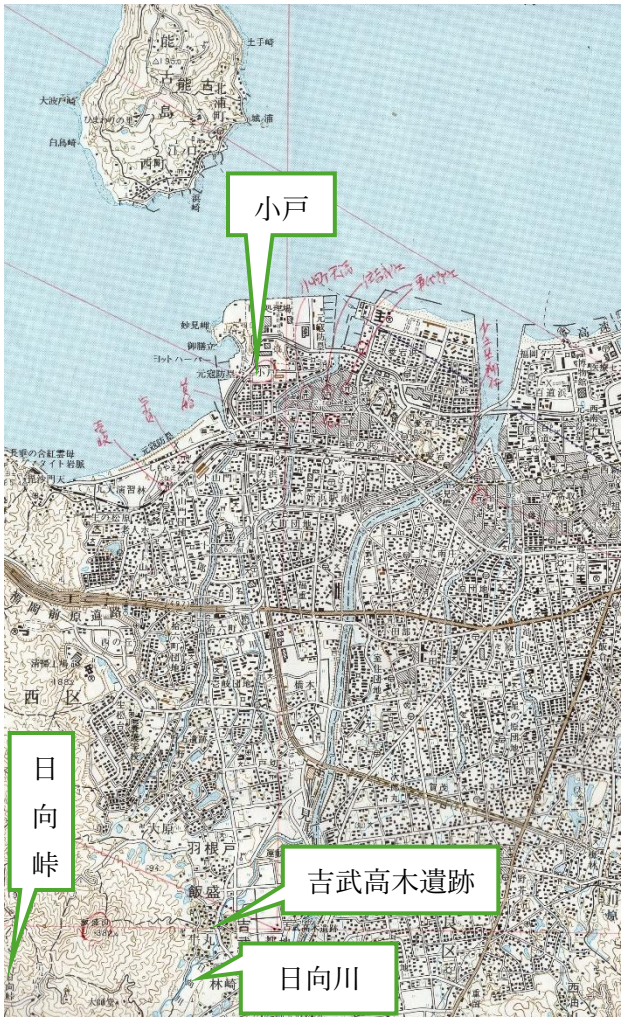
戊午年春二月丁酉朔丁未日、皇師(みいくさ)遂に東し給ふ。舳艫(ともへ)相接きて方(まさ)に難波の碕に到りし時奔(はや)潮あり、太(はなはだ)急(はや)きに會ひき。因りて名づけて浪速の国と為し給ひき。亦浪華とも曰ふ。今**難波**と謂へるは訛れるなり。三月丁卯朔丙子日、遡流(さかのぼ)りて径(ただち)に河内の国の**草香**邑なる青雲の白肩津に至り給ひき。夏四月丙申朔甲辰日皇師(みいくさ)兵を勒(ととの)へて歩(かち)より**龍田**に赴く。

（日本書紀）

日本書紀は日向(ひむか)を出発し、速吸門を経由し、筑紫国菟狭にたどり着く。そして筑紫国岡の水門・安芸国・吉備国を経由し、難波に至る。次は河内国草香で船を降り、徒歩(かち)で龍田に赴き、戦争に突入する。この話を一般的には、出発地日向(ひむか)を宮崎県日向高千穂とし、速吸門は豊予水道佐賀関、菟狭は豊前国大分県宇佐市、筑紫国岡の水門は北九州遠賀川河口、安芸は広島、吉備は岡山とし、難波から奈良に向かう峠で戦いが始まったと理解する。

だがこの一般説には乗り越えられない壁がある。出発地日向高千穂に縄文弥生文化の痕跡が少ないこと。筑紫国菟狭を豊前国大分県宇佐市に比定していいかという疑問。宇佐から広島に向かわず、関門海峡を渡って遠賀川河口に行く理由が見当たらないこと。そして近畿の龍田は大阪側になく奈良斑鳩の地にあること。日本書紀と古事記で速吸門の場所が違うこと。以上五点の疑問が以前より指摘されている。





本一古い都吉武高木遺跡(地名が都地)が存在する。まさに神武の出発地にふさわしい場所である。なお糸島市の細石神社と吉武高木遺跡・須玖岡本遺跡は同緯度線上に並ぶので、広幡は「細石神社→吉武高木→須玖岡本」と倭国の王都が東に移動したことを示す遺跡群とらえる。

記紀は神武東征説話を紀元前六六七年の話として紹介するが、この弥生時代のあけぼの期に博多湾岸に実在する中洲(農耕地)が「板付遺跡」。だからますます博多湾岸日向説が有利となる。

筑紫菟狭

次の経由地速吸門は日本書紀と古事記では紹介場面が異なるので後の検討とし、速吸門の次の地名「筑紫菟狭」を検討する。筑紫菟狭は従来説では「大分県宇佐」であるが、出発地日向が博多湾となると、「大分県宇佐」説はさらに存在価値が薄れる。これまでも「宇佐市から遠賀川河口」に回ることへの疑問が強かったが、「博多湾を出発して大分県宇佐に行き、遠賀川河口に戻る」となると矛盾が拡大する。そこで日本書紀の菟狭を確認する。

日の神の生れませる三女神を、葦原中国の宇佐島に降り居さしむ。今海北道中に坐す。號けて道主の貴(むち)と曰す。此は筑紫の水沼君等が祭る神なり。

日本書紀は宗像三女神紹介記事で「宇佐島」を紹介する。宗像三女神は宗像田島・大島・沖ノ島に祀られる。そして日本書紀は「海北道中」と、「宗像田島→大島→沖ノ島」が韓半島に向かう海の北道と強調する。従来の「呼子→壱岐島→対馬」に変わる新しい海道なのだ。

以上、「筑紫の菟狭」を「宗像田島」に比定する。宗像は筑紫の範囲であり、博多湾を出発して東行すれば当然通過しなければならない場所である。しかも次の経由地が「筑紫国岡の水門＝遠賀川河口」だから、すなおに「東征」コースとなる。

岡の水門から速吸門へ

出発地日向(ひむか)

では出発地日向を考えるため、日本書紀古事記の神話時代に記される日向(ひむか)を見る。

(伊弉諾尊の禊の場)日向の小戸の橘の檍原(あはぎはら)、(瓊瓊杵尊降臨地)日向の襲の高千穂の添(そほり)の山(日向の高千穂のくじふる嶺・日向の槵日の高千穂の峯＝木の花開耶姫住む)、竺紫の日向の高千穂の槵触(くじふる)嶺→吾田長屋の笠狭御碕、(瓊瓊杵尊陵墓)筑紫日向の可愛(埃)、(彦火火出見尊陵墓)日向の高屋、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊西洲宮に崩御、(彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊陵墓)日向の吾平の山

日向は記紀神話で伊弉諾尊のみそぎの場・瓊瓊杵尊の降臨地および陵墓・彦火火出見尊や彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の陵墓と紹介される。しかも「筑紫の日向」とも記される。これで南九州宮崎説より、北九州説が有利となる。実は「伊弉諾尊のみそぎの場、日向の小戸の橘」の「小戸」が博多湾室見川河口に小戸神社として今も存在する。そしてその小戸神社の南6㎞に日向峠・日向川があり、日向川と室見川の合流地に日

日本書紀は岡の水門から安芸・吉備に向かうが、古事記はここで日本書紀とは異なる見解を披露する。

神倭伊波礼毘古命、その同母兄五瀬命と高千穂宮に坐して議りてたまはく『何地に坐さば、平けく天の下政を聞こしめさむ。なほ東に行かむ』とのりたまひて、日向(ひむか)より発たして筑紫に幸行でましき。故豊国の宇沙に到り、…足一騰宮にて大御饗(あへ)献りき。其地より遷りまして、竺紫の岡田宮に一年坐しき。その国より**上り**幸でまして、阿岐国多祁理宮に七年坐しき。またその国より遷り**上り**幸でまして、吉備の高島宮に八年坐しき。その国より**上り**幸でまし時、亀の甲に乗りし人、速吸門に遇ひき。…槁根津日子と號けき。かれその国より**上り**行でます時、浪速の渡を経て、青雲の白肩の津に泊てたまひき。

古事記は日本書紀が日向(ひむか)と菟狭の間で紹介した「速吸門」を「宇佐→岡田(岡)→阿岐(安芸)→吉備」の次に紹介する。日本書紀と古事記が同じことを記しているとしたら、「岡田→阿岐→吉備→速吸門」の道行は、来た道を引き返したことになる。

そう考えて古事記を見つめると、岡田宮以降の移動にこれまで記されない「上り」の文字が使われている。船で玄界灘を移動する神武ら一行が「上る」というのは、玄界灘の対馬海流に逆らい西に向かうということ。だから神武ら一行は岡田宮＝遠賀川河口から引き返し、菟狭(宇佐)＝宗像田島を通り越して、宗像より博多湾に近い速吸門まで戻ったことになる。博多湾と宗像の間にある流れの速い速吸門・難波候補地は、津屋崎湊および津屋崎内海(旧入海)である(上図)。



【注】津屋崎湊は難波王応神天皇の母神功皇后を主神と祀る宮地嶽神社の門前町である。故に難波候補地にふさわしい場所である。宮地嶽神社内には石室全長二十三㍍という石室の大きさ国内二位の宮地嶽古墳(製造は七世紀中ごろと推定)がある。

安芸・吉備

さて速吸門の手前、安芸と吉備を特定しなければならない。これまでの流れからすると、津屋崎旧入海と遠賀川河口の間に、安芸と吉備が存在することになる。その安芸・吉備が日本書紀でどう記されるかを確認する。

素戔嗚尊、大蛇の尾を斬りたまふ時…剣ありき。草薙の剣と号く。今は尾張の国吾湯市村に在り。熱田の祝部が掌る神なり。今**石上**と曰ふ(第二の一書)。今**吉備の神部**の許に在り(第三の一書)。…是の時素戔嗚尊、**安芸国の可愛(埃)**の川上に下到りまして、稲田宮に住まふ。

なんと素戔嗚尊の八岐大蛇退治で「吉備の神部」と「安芸国可愛(埃)」が紹介され、安芸国可愛(埃)が稲田宮と記される。神武東征でも神武らが七年暮らした安芸国埃宮が記されるから、同じ場所である。しかも古事記は「阿岐国の多祁理の宮」と紹介する。多祁理の宮は宗像三女神の一人多紀理毘売命に通じる。したがって「安芸国可愛(埃＝川の合流地)」は釣川と樽見川の合流地宗像大社となる。

宗像大社の主神は御手長神で、出雲大社の主神でもある。だから、出雲は宗像と考えざるを得ない。そもそも素戔嗚尊は宗像三女神の父親だから、宗像に坐すのが自然である。

次は吉備地名。「吉備国蚊屋の采女を妃とし蚊屋皇子を生みき」と吉備国蚊屋が舒明紀に記され、応神四十一年二月「阿知使主等、呉より筑紫に至りき。時に胸形の大神、工女等を乞ひ給ふ。故兄媛を胸形の大神に奉りき。是今筑紫国に在る御使君の祖なり。三人の婦女等は、今の呉の衣縫、蚊屋の衣縫なり」と、蚊屋の衣縫が記される。呉・蚊屋は韓国南部の久礼・伽耶のこと。来日した兄媛は津屋崎縫殿

神社で働いたと伝えられるので、吉備国蚊屋は鐘崎織幡神社となる。吉備は吉備高嶋宮とも称され、近江の高嶋に重なる。素戔嗚尊大蛇退治で石上の宮司を吉備の神部と記すので、織幡神社の宮司壱岐氏を「吉備の神部」と紹介していることになる。織幡神社のある鐘ノ岬は昔島で、黍(きび)のように丸い形をしている。

しかも後の難波天皇仁徳が難波の崎で吉備島出身の黒姫の帰郷を見送った歌「おしてるや、難波の崎よ、出で立ちて、我が国見れば、淡島、自凝(おのごろ)島、檳榔(あじまさ＝椰子やし)の島も見ゆ、放(さけ)つ島見ゆ」に登場する島々を、難波＝津屋崎湊の高台大峰山から見たとして考えると、淡島＝相ノ島、自凝(おのごろ)島＝小呂(おろの)島、檳榔(あじまさ)の島＝玄界島の隣の柱島、放(さけ)つ島(黒姫の故郷吉備島)＝壱岐島となる。よって吉備島が壱岐島となる。(最終へージに図面)

なお安芸可愛を釣川と樽見川の合流地とし、吉備を鐘崎とすると、「上り」に反すると思う方が居るに違いない。実は樽見川の支流が鐘崎・高向を上流部とするので、樽見川を舟で上ったと考えられる。

難波方　潮干乃なごり　よく見てむ　家なる妹が　待ち問はむため
直超乃　この径に弓師　押照や　難波の海と　名付けけらしも

神武たちが船を降り徒歩で歩き始める「青雲の白肩津＝草香」地名を説明する材料は少なく、万葉集の草香山を紹介した。草香山より難波潟・難波の海が見えるので、現在の仮説「難波＝津屋崎湊」に一番近い山、宮地嶽(標高一八二㍍)を草香山としたい。すると草香は宮司となるが、草香地名の詳細な検討は、別の機会で行いたい。

敗戦のあと、熊野へ

その国より上り行でましし時浪速の渡りを経て青雲の白肩津に泊てたまひき。この時登美の那賀須泥毘古、軍(いくさ)を興して待ち向へて戦ひき。ここに御船に入れたる楯を取りて下り立ちたまひき。故、其地を號けて楯津と謂ひき。今に**日下**の蓼津と云ふ。ここに登美毘古と戦ひたまひし時、五瀬命、御手に登美毘古が痛矢串を負ひたまひき。故ここに詔りたまひしく『吾は日神の御子として、日に向ひて戦ふこと良からず。故、賤しき奴が痛手を負ひぬ。今より行き廻りて、背に日を負ひて撃たむ』と期(ちぎ)りたまひて、南の方より廻り幸でましし時、血沼海に到りて、…其地より廻り幸でまして、紀国の男の水門に到り…て崩りましき。…陵はすなはち**紀国の竈山**にあり。(古事記)

夏四月丙申朔甲辰日、皇師(みいくさ)兵を勒(ととの)へて歩(かち)より**龍田**に赴く。其の路狭(さ)く険(さか)しくして、人並みに行くことを得ざりしかば、やがて還りて、更(また)東の方**膽駒山**を踰(こ)えて、中洲に入らむと欲ひ給ひき。時に長髄彦聞きて曰ひしく『夫、天つ神の子等来でましし所以(ゆゑ)は、必ず我が國を奪はむとにあらむ』と云ひて、盡(尽＝ふつ)に属兵を起して、孔舎衛坂に徼(むか)へて與(とも)に會ひ戦ひしに、流れ矢ありて五瀬の命の肱脛(ひじはぎ)に中れり、皇師(みいくさ)進み戦ふこと能はざりき。天皇憂ひ給ひて、すなはち神策(はかりごと)を冲衿(みこころのうち)に運(めぐら)し給ひ、宣り給ひしく『今我は是日の神の子孫として、日に向ひて虜(あだ)を征(う)ちしは、此天の道に逆(さか)れり。退き還りて弱きことを示し、神祇(あまつやしろ)を禮(ゐは)ひ祭りて、背に日神の威(いきほひ)を負ひて、影のまにま襲ひ踏まむには若(しかじ。此くの如くならば、刃に血ぬらずして、虜(あだ)必ず自から敗れなむ』と宣り給ひしかば、みな『然り』と曰しき。すなはち軍(いくさ)を引きて還り給ひしに、虜(あだ)も亦敢へて逼(せ)めざりき。却きて**草香**の津に至り、盾を植(た)てて雄誥(をたけ)り給ひき。因りて其の津を號けて、盾津と曰ふ。

五月丙寅朔癸酉日、軍、**茅淳の山城の水門**(亦の名は山の井の水門)に至り給ひき。時に五瀬の命の矢の瘡(きず)痛み給ふこと甚し。すなはち劒の柄を撫(とりしば)りて、雄誥(おたけび)し給ひしく『慨(うれた)きかや。大丈夫(ますらを)にして、虜(やっこ)が手に傷つけらえて、報いずして死なむこと』と宣り給ふ。時の人其の處を號けて、雄の水門と曰ふ。進みて**紀伊国の竈山**に到りて、五瀬の命、薨(かむさ)り給ひき。因りて竈山に葬め奉りき。

龍田地名は関西では奈良県斑鳩町にある。日本書紀の「神武東征」記事では生駒山は龍田の東にあるのに、関西生駒山は斑鳩町龍田地区から見て北西に位置する。こんな大きな違いを、なぜ放置するのだろう。龍田地名の検討は最後の項にまわす。

次に登美・鳶(磐余)を本拠地とする那賀須泥毘古(長髄彦)に、孔舎衛坂で撃退された神武軍は兄五瀬命が瀕死の重傷を負い、茅渟の山城の水門まで撤退し、紀伊国の竈山に兄五瀬命を弔う。その紀伊国と竈山が仁徳天皇代に登場する。

仁徳四年春二月、『朕高台に登りて遠く望むに、烟気(けふり)域(くに)の中に起たず。おもふに百姓既に貧しくして家に炊(いひかし)ぐ者無きか。朕聞(き)かくは、古の聖王の世には、…家々に廉(やす)らけき哉といふ歌ありき。今朕億兆(おほみたから)に臨みてここに三年になりぬ。頌音(歌声)聞こえず炊烟いよいよ疎(まば)らなり。…今ゆ後三年に至るまで、ことごとく課役を除(や)めて百姓の苦しみを息(いこ)へ』と宣り給ひき。…三稔の間に百姓富寛(ゆたか)に頌徳(たたへごと)既に満ちて、炊(いひかし)ぐ烟の亦繁かりき。

仁徳三十年九月、皇后紀の国に遊行し熊野の岬に到り、其処の御綱葉(柏)を取りて還り…。時に皇后、難波の済に到りて…御綱葉を海に投(い)れ…、天皇、親(みずか)ら大津に幸し、皇后の船を待ち給ひ…。時に皇后、大津に泊て給はずして、江を上り、山背より廻りて倭に向ひき。

仁徳天皇が難波の高台から難波の家々を眺め、竈(かまど)から烟気(けむり)が立っていないと嘆く。難波の高台と竈(かまど)、これが竈山の語源と思われる。そして難波天皇仁徳の皇后が紀の国に遊行し、帰りに「難波の済」に至る。難波は津屋崎湊に比定しているので、津屋崎湊の向かい、津屋崎渡地区が紀の国・紀伊国となる。当時津屋崎渡地区は陸地と離れた島(前図)。そして紀伊国＝津屋崎渡地区で一番高い山大峰山が竈山と思われる。

熊野高倉は岡垣町高倉神社

六月乙未朔丁巳日、軍、**名草**の邑に至りて、名草戸畔と云ふ者を誅ちき。遂に**狭野**を越えて**熊野**の神邑に到り、且(すなはち)天の磐盾に登りて、仍(よ)りて軍を引きて漸(ようよう)に進みしに、海の中にして卒(にはか)に暴風に遇ひ、皇舟(みふね)漂蕩(ただよ)ひき。時に稲飯(いなひ)の命すなはち歎き宣り給ひしく『ああ吾が祖(みおや)は天つ神、母は海神にまします。如何にぞは我を陸にたしなめ、復我を海にたしなむや』と云ひ訖(を)へて、すなはち剣を抜き、海に入りて鋤(さひ)持の神と化為りき。三毛入野の命、亦恨みて宣り給ひしく、『我が母と姨とは、並是海神にまします。何為(いか)にぞ、波を起こして溺らすや』と云ひて浪の秀(ほ)を踏みて、常世の郷に往でましき。天皇獨り、皇子手研耳(たぎしみみ)の命と軍を帥(ひき)ゐて進み、熊野の荒坂津(丹敷の浦)に至り、因りて丹敷(にしき)戸畔と云ふ者を誅ち給ひき。時に神、毒気を吐きて、人物咸(ことごと)に瘁(疲＝を)えき。是に由りて皇軍(みいくさ)復起つこと能はざりき。時に彼處に人あり。號を**熊野の高倉下**と曰ふ。忽(たちまち)に夜夢みらく、天照大神、武甕雷の神に謂り給ひけらく、『夫葦原の中つ國は猶騒(さや)げりなり。宜(うべ)、汝(いまし)往きて征て』と。武甕雷の神、對へ曰しけらく『予(やつがり)行かずとも、予が國を平けし剣を下さば、國自ら平けなむ』と申ししかば、天照大神『諾(うべ)なり』と宣り給ひき。時に武甕雷の神高倉下に謂(かた)りて宣り給はく、『予が剣を號けて韴霊(ふつのみたま)と曰ふ。今汝が倉に置くべし。宜(うべ)取りて天孫に献れ』と宣り給ひき。高倉下『唯唯(おお)』と曰すと見て寤(さ)めき。明旦、夢の中の教へによりて倉を開きて視るに、果して落ちたる剣ありて、倒(さかしま)に倉の底(しき)板に立てりしかば、やがて取りて進(たてまつ)りき。時に天皇、適(よ)く寝(み)ねませり。忽ちに寤(さ)め宣り給ひしく、『予何ぞ此(か)く長眠(い)しつる』と宣り給ひき。尋(つ)ぎて毒に中(あた)りし士卒、悉(ふつく)に復(また)醒めて起ちき。既にして皇師(みいくさ)、中洲に趣かむと欲ひて、而も山の中嶮絶(さか)しく、復行くべき路無かりき…。時に夜夢み給ひて天照らす大神天皇に訓(をし)へまつりて『朕今頭八咫(やた)烏を遣(つかは)さむ。宜く郷(くに)の導き者と為せ』と宣り給ひき。果して頭八咫烏ありて、空より翔び降りき。天皇『此の烏の来たること、自から祥(よ)き夢に叶へり。大きなるかも、赫(さか)りなるかも、我が皇祖天照大

神、基業(あまつわざ)を助け成さむと欲せるか』と宣り給ひき。是の時大伴の遠祖日臣(ひのおみ)の命、大来目の督将(いくさきみ)として元戎(つはもの)を帥ゐて、山を踏み啓(みちひら)き行きて、すなはち烏の向へるまにま、仰ぎ視て追ひ、遂に**菟田**の下つ縣に達りき。因りて其の至れりし處を號けて、菟田の穿の邑と曰ふ。時に勅して日臣の命を誉めて『汝(いまし)忠ありて且つ勇めり。また能く導きの功あり。是以ちて汝が名改め道臣と為せ』と宣り給ひき。（日本書紀）



次に登場する名草地名だが、日本書紀神功皇后三韓征伐記事で宗像大神の名と紹介される(注)ので、宗像市神湊と考える。しかも神湊の近くに草崎がある。

【注】日本書紀神功三韓征伐に「遣磯鹿海人**名草**而令視、数日還之曰、西北有山帯雲横…」、『住吉大社神代記』に「然而新羅国服給…亦大神社奉定而祝志加之奈具佐」と記され、『宗像大菩薩御縁起』に「志賀嶋明神、其時者磯良丸、姓安曇、海中於栖、時々陸地出来。…梶取安曇磯良也、対馬島着給、天為豊姫御使遣龍宮城、乾珠満珠二顆珠於借給。」「高磯強石将軍也、捧御長手来給、于時武内大臣赤白二流之旗織持」と記す。(日本国家成立の研究・田中卓)

そして次に登場する狭野は万葉集で歌われる「狭野」で、神之埼＝鐘崎の京泊にあたる。鐘ノ岬も昔島だったので、鐘崎織幡神社に行くとき「狭野乃渡」(現在の鐘崎祓川付近)を船で渡った。

苦しくも零り来る雨か神之埼狭野乃渡に家も有らなくに(二六五)

秋風乃寒き朝開を佐農の岡超ゆらむ公に衣貸さましを(三六一)

ここまで「竈山(津屋崎渡地区)→名草(神湊)→狭野(鐘崎)」と再び東行しているので、「天の磐盾」は鐘崎の東山＝湯川山(標高四七一メートル)。そして「熊野・高倉下」を岡垣町吉木の高倉神社に比定する。高倉神社には神武天皇ご本人が祀られており、しかも古墳時代の貝塚があり、汐入川にそって海が湾入し、ここまで船で来れたと思われる。

吉野の河尻

是の後、天皇**吉野**の地を省(み)むと欲(おもは)して、菟田の穿の邑より親(みずか)ら軽けき兵を率て巡り幸しき。吉野に至りましし時、人ありて井の中より出でたり。光りて尾あり。天皇『汝は何人ぞ』と問ひて、對へて『臣は國つ神にして、名を井光といふ』と申しき。此は吉野の首部(おびと)が始祖なり。更に少しく進み給ひしに亦尾ありて磐石を披(おしは)けて出づる者あり。天皇『汝は何人ぞ』…。此は吉野國樔部(くずら)が始祖なり。水(かは)に縁(そひ)て西に行き給ふに及びて、**梁作(う)ちて取魚(すなどり)する**者あり。此は**阿太**の養鸕(うかひ)部が始祖なり。

九月**菟田の高倉山**の嶺に登り給ひて城中を瞻望(おせり)み給ひき。時に国見岳の上に八十梟帥(たける)あり。又女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置き、墨坂に熾(おこ)し炭を置きき。復兄磯城の軍ありて、**磐余**の邑に布き満(いは)めり。賊虜(あた)の拠る所は皆是要害の地なり。故、道路(みち)絶え塞(ふさが)りて通る處なかりき。(日本書紀)

かれ高木大神の御教(さとし)のまにまに、八咫烏の後より幸でましかば、**吉野河の河尻**に到りましき。時に**筌(うへ)をうちて魚取(すなどれ)る**人あり。其の地より踏み穿ち越えて、**宇陀**に幸でましき。(古事記)

次に登場する吉野の記載が日本書紀と古事記で異なる。日本書紀は吉野を進路より外れた場所とするが、古事記は進路上とする。吉野を関西の吉野とすれば、吉野の河尻は紀の川の河口＝和歌山港となる。これでは熊野に向かった軍隊が元の場所に戻ってしまう。この矛盾を解決するには、「吉野の河尻」を河口とせず、吉野川がほかの川と合流する場所と考えなければならない。

神武東征の吉野山は高倉神社の真西にある孔大寺山(四九九メートル)。孔大寺山の東側ふもとに孔大寺神社があり、高倉神社と同緯度線上にある。この孔大寺神社が吉野本宮と思われる。だから吉野河は孔大寺山のふもとを流れる樽見川。樽見川は垂見峠を源流に、宗像方面へと流

れ下る。そして向田野地区で氏川(注)候補の田野川と合流する。だからこの向田野地区が「吉野の河尻」「簗(やな)をうちて魚取る」場所、阿太である。人麻呂も「氏川に魚取りの網代(阿白)をかける」と詠んでいる。ここで阿太地名を詠んだ万葉歌と一緒に紹介する。

物乃部の　八十氏河乃　阿白木に　いさよふ浪の　去邊知らずも(二六四)
安太人の　簗打ち渡す　瀬を速み　心は念へど　直に相ぬ鴨(二六九九)
是川の　水泡逆巻き　行く水の　事反らずぞ　思ひ始めたる(二四三〇)



物部の八十氏人も吉野川　絶ゆることなく　仕へつつ見む(四一〇〇)

万葉集でも「安太人の簗打ち渡す」と詠んでいる。阿白木は川の瀬に杭打ちし竹網などを仕掛けること。なお「是川」と書いて「氏川」と読む。そして大伴家持が「八十氏人も吉野川仕へつつ見む」と、氏川が吉野川の下流にあたると示唆する。

次に登場する菟田の高倉山は現在の吉田山。眼下に宗像大社の地、田島・深田地区が見える。宗像大社のあるこの深田地区が磐余である。

【注】淡海の海瀬田の済に潜く鳥　田上過ぎて菟道に捕へつ(日本書紀・忍熊王)

日向は三輪神社

次に日本書紀の日向を検討する。実は奈良県の大神(三輪)神社の山頂(現在高宮神社がある)に、昔神坐日向(みわにますひむかい)神社があった(現在は敷地内に移動)。しかも大神神社の初代神主がオオタタネコ(大田田根子)。したがって日向は三輪神社の存在する地。そこで大田田根子の記紀説話=箸墓伝説を紹介する。

倭迹迹日百襲姫命、大物主の神の妻と為り給ひき。然るにその神常に昼は見えずして、夜のみ来ませり。倭迹迹姫命、夫(せな)に語り給ひしく『君常に昼は見えまさねば、分明(あきらか)に其の尊顔を視ることを得ず。願はしくは暫し留り給ひね。明けむ旦に、仰ぎて美麗しき御容姿を観まく欲ふ』と曰し給ふ。大神對へ給ひしく『言理(ことはり)灼然(いやちこ)なり、吾明けむ旦に汝が櫛笥に入りて居らむ。願はくは吾が形にな驚きましそ』と曰ひ給ひき。ここに倭迹迹姫命、心の裏に密に異(あやし)み給ひ、明くるを待ちて櫛笥を見れば、美麗しき小蛇あり。其の長さ太さ衣紐の如くなりしかば、驚きて叫び啼き給ひき。時に大神恥じて人の形に化り、其の妻に謂り給ひしく、『汝、忍びずて、吾に羞見せつ。吾還りて汝に羞見せむ』と宣りて、仍りて大虚(おほぞら)を践(ふ)みて御諸山に登り給ひき。ここに倭迹迹姫命、仰ぎ見て悔いて急居(つきう)。箸にて陰を衝きて薨りましき。すなはち大市に葬めまつりき。故時の人、其の墓を号けて箸墓と謂ひき。是の墓は日は人作り、夜は神作りき。故大坂の山の石を運びて造るに、山より墓に至るまで人民相継ぎて手ごしにして運びき。(A)

日本書紀の三輪神社にまつわる説話で、倭迹迹姫命が見知らぬ男と恋に陥り、その男が明くる朝蛇になっていたので、びっくりして陰を箸で突いて死んでしまったという箸墓古墳説話が紹介される。では古事記ではどう紹介されるか。

活玉依毘売、その容姿(かたち)端正(うるは)しくありき。ここに壮夫ありて、その形姿威儀(すがたよそほひ)時に比無きが、夜半の時にたちまち到来つ。故、相感(め)でて共婚(まぐは)ひして共住める間に、未だ幾時もあらねば、その美人妊身みぬ。ここに父母その妊身みしき事を怪しみて、女に問ひて曰く、『汝は自ら妊みぬ。夫無きに何由か妊身める』といへば、答へて曰く『麗美しき壮夫ありて、その姓名も知らぬが、夕毎に到来て共住める間に、自然懐妊みぬ』と曰ひき。父母、その人を知らむと欲ひて、女に誨(おし)へて曰く『赤土を床の前に散らし、巻子紡麻(へそのを)を針に貫きて、その衣の裾に刺せ』と曰ひき。故、教への如くして旦時に見れば、針著けし麻(を)は、戸の鉤穴より控(ひ)き通り出でて、遺れる麻は三勾なりき。ここに鉤穴より出でし状(さま)を知りて、糸の従(まにま)に尋ね行けば、美和山に至りて神の社に留まりき。故、神の子と知りぬ。麻の三勾遺りしより、其地を名づけて美和と謂ふなり。(B)

古事記では姫が死ぬことはなく、へそのをを針に貫き男の衣の裾に刺したところ、針に著けた麻(を)が鉤穴より外に出て美和山に至った

という話で、へその麻(を)が三輪残ったので三輪と名付けたという三輪地名説話になっている。しかも針・麻と箸墓を裁縫と深く関係する地と説明する。そして次は大田田根子が登場する三輪山説話である。

『昨の夜の夢に、一人の貴人ありて誨へけらく、大田田根子の命を、大物主の大神を祭る主とし、亦市磯(いちし)長尾市を、倭の大國魂の神を祭る主と為さば、必ず天下太きに平ぎなむと申しつ』と申しき。天皇、夢の辞を得て、益々心に歓(よろこ)び給ひ、布(あまね)く天下に告りて大田田根子を求(ま)ぎ給ひしかば、やがて茅淳の縣の陶邑に大田田根子を得て貢(たてまつ)りき。天皇すなはち、親(みずか)ら神浅茅原に臨(い)でまして、諸の王卿と八十諸部とを會へて、大田田根子に『汝は誰が子ぞ』と問ひ給ひき。對て曰く『父ぞ大物主の大神と曰ひ、母を活(いく)玉依媛と曰ひて、陶津耳の女なり』と申しき。亦は奇日(くしひ)方天つ日方、武茅淳祇(たけちぬつみ)の女なりとも云へり。天皇宣り給ひしく、『朕栄楽えむかも』と宣り給ひて、すなはち物部連の祖伊香色雄をして、神の班物(あかつもの)者(ひと)と為むといふに吉かりき。(日本書紀)

駅(はゆま)使ひを四方に班(あか)ちて、意富多多泥古と謂ふ人を求めたまひし時、河内の美努村にその人を見得て貢進(たてまつ)りき。ここに天皇問ひ給はく、「汝、誰が子ぞ」。答へて曰く「僕は大物主の大神、陶津耳の命が女、活玉依毘賣を娶して生ませる、僕意富多多泥古」とまをしき。(古事記)(C)

大田田根子(意富多多泥古)が活玉依毘賣の子と紹介されるので、古事記三輪伝説の一世代後の話となる。すなわち記紀の三輪説話は「B→C→A」の順である。だから大田田根子は市磯(いちし)長尾市＝箸墓古墳に呼ばれる前、茅渟縣の陶邑(記＝河内の美努村)に居たことになる。茅渟縣は五瀬命の死んだ場所(茅渟の山城)。そこが大田田根子の最初の三輪神社(日向)。結果、津屋崎大峰山が最初の日向地区三輪山となる。だから津屋崎大峰山が神武東征の出発地である可能性が浮上する。

実は三輪山伝説はこれで終わらない。古事記は神武天皇の后比賣多多良伊須気余理比賣を三輪神の子と紹介する。

三島溝咋の女勢夜陀多良比賣、その容姿麗美しき。故美和の大物主神見感でて丹塗矢に化りてその美人の陰を突きき。美人驚きて立走りいすすきき。すなはちその矢をもち来て床の邊に置けば、忽ち麗しき壮夫に成りて娶して生める子名は富登(ほと)多多良伊須岐比賣命と謂ふ。亦の名は比賣多々良伊須気余理比賣。

古事記は比賣多多良伊須気余理比賣の住まいを伏せている。それにしても古事記は同様の三輪山説話を神武と崇神の二代に記し、平気な顔をしている。二人はどちらも「はつくにしらす天皇」だから、同一人物とせざるを得ない。

ここで津屋崎大峰山をモデルに、日向＝三輪山の役割を確認する。

津屋崎大峰山は須玖岡本遺跡の真北にある。そして田島宗像大社が太宰府跡の真北に位置する。だから大峰山は弥生時代三世紀、宗像大社は七世紀に対応する遺跡と推定できる。

その大峰山山頂から見て、西側にある相ノ島高妻神社(糟屋郡新宮町相島735)に夏至の太陽が沈み、東側津屋崎須多田の天降天神社から冬至の太陽が昇る。山は移動しないが、神社の場所は人が決められる。だから大峰山山頂から夏至・冬至を確認できる場所に神社を建てたと言える(図下)。すなわち「日向＝三輪山」は季節を確認する場所。農耕社会ではとても大切な役割だったはず。



そして追加すると、相ノ島高妻神社は宮地嶽神社の参道光る道の延長線上にある。だから宮地嶽古墳に納められた人物と関係の深い女性が祀られていることになる。実は宮地嶽神社も日向三輪山である。西夏至の太陽が沈む場所に玄界島山頂(標高二一八メートル)があり、東冬至の太陽が昇る場所に宗像城山(標高三六九メートル)がある。

さらに日向を穿つ

日向はこれで終わらない。さらに日向(ひむか)を掘り下げる。

応神十三年春三月、天皇、日向国諸縣君牛諸井の娘髮長媛を徴(め)さしめき。一に云はく、日向の諸県君牛、朝廷に仕へ年老いて仕ふること能はず。本土(もとつくに)に退(まか)る。則ち己が女髮長媛を貢上る。初めて播磨に至りし時、天皇**淡路島**に幸して遊狩したまふ。ここに天皇、西のかたを望むに、十あまりの麋鹿(おほしか)海に浮きて来たれり。便ち、**播磨の鹿子の水門**に入りき。天皇、使を遣はして察(み)さしむ。使者至りて見るに、皆人なり。角著ける鹿の皮を衣服と為せるなり。問ひて曰く「誰人ぞ」。対(こた)へて曰く、「**諸県**君牛、是年老いて致仕(まかりさ)ると雖も、朝(みかど)忘れかねつれば、故己が女髮長媛を貢上る」とまうす。

応神天皇が淡路島に行幸した時、播磨の鹿子の水門(みなと)で鹿皮を着た人々と出会う。それが日向国諸縣の君牛諸井。この応神紀の諸県記事より、日向国は淡路島と判明。すると津屋崎渡地区は淡路島にも比定されることになる。

その日向国諸県は、景行天皇代にも登場する。

景行十二年八月筑紫に幸しき。九月**菟狭の川上**に屯結(いは)めり。十一月に**日向国**に到りて行宮を起てて居(ま)します。是を**高屋宮**と謂ふ。

景行十八年三月、天皇京に向はむとして筑紫の国を巡狩し始めて夷守に到る。是の時石瀬の河辺に人集(つど)へり。天皇、夷守兄弟を遣はしむ。弟夷守還り来て曰さく「**諸縣**の君泉媛、御食献らんとして其の族(やから)会(つど)へり」。

景行天皇紀では日向を筑紫行幸記事で紹介し、しかも日向国諸県や菟狭の川上(宗像大社)まで紹介する。これで日向(ひむか)諸県＝淡路島は宗像地方に特定される。しかも景行紀は「日向高屋宮」すなわち彦火火出見尊の墓地まで紹介する。このように日本書紀は一貫して日向(ひむか)を天孫降臨地と意識している。その降臨場面を紹介する。

時に高皇産靈の尊、真床追衾を皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊に覆ひて降(あまくだりまさしめき。皇孫乃ち天の磐座を離(おしはな)ち、且(また)天八重雲を排(をし)分けて、稜威(いつ)の道別に道別きて、**日向の襲の高千穂**の峯に天降りまし き。既にして皇孫遊行(いで)ます状は、槵日の二上の天の浮橋より浮渚在(うきじまり)平処(たひら)に立たして、膂宍(そしし)の空国を頓丘(ひたを)から国覓(まぎ)行去り、吾田の長屋の笠狭(長狭)の碕に到りましき。(一書)

時に虚天に居て生れましし児、天津彦火の瓊瓊杵尊と號す。天津彦火の瓊瓊杵尊、**日向の槵日の高千穂**の峯に降到りまして、**膂宍の胸副(そふ)国**を頓丘(ひたを)から国覓(まぎ)行去り、浮渚在平地に立つ。(二書)

日向は茅渟県＝紀伊国竈山＝津屋崎渡地区に比定されている。その日向に降臨する場面で「膂宍(そしし)の空国」が記されるが、「膂宍(そしし)の空国」は仲哀天皇の筑紫幸場面にも登場する。

八年秋九月詔して熊襲を討たむことを議(はか)らしめたまふ。時に神、皇后に託(かか)りて曰はく、「天皇、何ぞ熊襲の服(まつろ)はざることを憂(うれ)へたまふ。是、膂宍(そしし)の空(むな)国。豈(あに)、兵を挙(こぞ)りて伐(う)つに足らめや。この国にまさりて宝有る国、処女のまよびきの如くして津に向へる国有り。是を栲衾新羅国と謂ふ。能く吾を祭りたまはば、其の国必ず自から服はむ。復、熊襲も服はむ。…」とのたまふ。天皇信じ給はず、強いて熊襲を撃ち、勝つを得ずして還り給ひき。九年二月天皇忽(たちまち)に病身(なや)ませ給ふて、明くる日崩り給ひき。

神功皇后の三韓征伐につながる話のなかで、「膂宍(そしし)の空国」が紹介される。その「膂宍の空国(むなくに)」が天孫降臨で「膂宍の胸副(そふ)国」とも記されるので、「宗像(胸方)に沿う国」となる。そして神功皇后は今も宮司・宮地嶽神社の主神として祀られる。そして注目されるのが神武天皇の父彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の墓地である。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、其の姨玉依姫を妃と為して、彦五瀬の命を生みませり。次に稲飯の命、次に三毛入野の命、次に神日本磐余彦尊、すべて四男を生みましき。久しくましまして彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、**西洲の宮**に崩りましぬ。因りて**日向の吾平の山の上**の陵に葬めまつりき。



彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の墓地は「日向の吾平の山上」と記されるが、「西洲の宮に崩ずる」とある。日向＝津屋崎渡島は淡路島。その淡路島(＝津屋崎渡島)が東西二つの島に分かれていたことを日本書紀は知らせてくれる。瀬戸内海の淡路島は三個ないし四個からなる島が一つになった島。一方、津屋崎渡島には二つに分かれていた時代(上図)がしっかりと刻まれている。

以上により、神武東征の日向(ひむか)を、博多湾岸から津屋崎渡地区に移動させなければならない。結果、神武東征は「津屋崎から宗像までの小旅行」となる。

龍田の検討

では最後に龍田地名の検討を行う。

夏四月丙申朔甲辰日、皇師(みいくさ)兵を勒(ととの)へて歩(かち)より**龍田**に赴く。其の路狭(さ)く険(さか)しくして、人並みに行くことを得ざりしかば、やがて還りて、更(また)東の方**膽駒山**を踰(こ)えて、中洲に入らむと欲ひ給ひき。

上宮聖徳皇子遊竹原井之時**龍田山**死人悲傷歌(巻三・四一五)

家に有らば　妹が手巻かむ　草枕　客に臥やせる　この旅人哀れ

推古二十一年十二月、皇太子**片岡**に遊行しき。飢ゑたる者道のほとりに臥(こや)せりき。姓名を問ひ給うも言(まう)さざりき。皇太子、飲食を与え、衣裳を脱ぎて飢ゑたる者に覆ひて『安らに臥せ』と宣り給ふ。

しなてる　**片岡山**に　飯に飢(ゑ)て　臥せる　その旅人あはれ

万葉集で龍田山と呼ばれる地が、日本書紀では片岡山と記される。「茨城里、此より北に高き丘あり。努賀毘咩(ぬかひめ)、室に在りしに、有る人の求婚に就きて、夜に来たりて昼に去る。遂に夫婦に成りて、一夕に懐妊(はら)みぬ。産月に至りて、終に小さき蛇を生む。…因りて此の峰に留まりき。盛りし貧(もたひ)と甕(みか)は、今も**片岡**の村にあり。」(常陸国風土記)

その片岡山が常陸国風土記に登場する。実は常陸国風土記に「筑波(つくは)の郡、東は茨城の郡、南は河内の郡、西は毛野河、北は筑波岳也。古老のいへらく、筑波の県は、古、紀の国と謂ひき。」の文面がある。この「紀の国」を日本書紀や万葉集の「紀の国」とした時、常陸国風土記の三輪山伝説地片岡村が龍田山と箸墓古墳に重なる。実は津屋崎の世界歴史遺産新原奴山古墳群の二十二号古墳頂上に縫殿神社がある(現在は奴山のふもとに移動)。よってこの縫殿古墳が箸墓となり、その地新原が龍田＝河内茨木＝片岡に比定される。新原地区の西側は旧津屋崎入江のほとりなので、片岡と呼ばれるにふさわしい。

万葉集の龍田の歌も、龍田が海の近くと想像させる。

春三月諸卿大夫下難波時歌(巻九・一七四九～五〇)

白雲の　立田山を　夕晩(くれ)に　打ち越え去かば　瀧の上の　櫻花は　開きたるは　落り過ぎにけり　含(ふふ)めるは　開き継ぎぬべし　こちごち乃花の盛りに　在らねども　君が三行きは　今西有るべし

暇(いとま)有らば　魚津(なづ)さひ渡り　向つ峯(を)の櫻の花も　折らまし物を

龍田の山で櫻花を楽しむ作者が、暇があったら海を渡って、向かいの峰の桜も楽しめるのに、と歌っている。

風吹けば沖つ白波たつた山　夜半にや君がひとり越ゆらむ(古今集)

山風(あらし)吹く三室の山の紅葉葉は竜田の川の錦なりけり(百人一首)

平安時代の歌に登場する「龍田」の歌で、「沖つ白波が立つ山」「三室山(三輪山)の紅葉が流れる



川」と紹介する。万葉歌よりはっきりと龍田の場所を表示している。これで、龍田山は海に近く三輪山にも近いことがはっきりした。

箸墓古墳に比定される新原二十二号古墳の真東に奴山があり、そのふもとに現在の縫殿神社がある。だから三輪山は奴山に比定される。万葉集に歌われる三輪山である。

額田王近江国に下る時井戸王即ち作りし和歌(巻一・一七～九)

味(う)まし酒　三輪の山は　青丹よし　奈良の山べの　山際に　伊隠るまでに　道の隈　伊積もるまでに　委(つばら)にも　見つつ行かむを　しばしばも　見さけむ山を　情(こころ)なく　雲乃隠れは　障り倍之也

三輪山を　然も隠すか　雲だにも　情有らなも　隠さふべしや

綜麻(へそ)形の林の始(さき)乃　狭野榛能　衣(きぬ)尓著く成り　目につく和がせ

万葉集も綜麻(へそ)の麻(を)・榛＝針・衣(きぬ)と、三輪山が裁縫と関連する社と紹介する。しかもほかの歌で裁田山と記載する。

雁鳴乃来鳴き之なへに韓衣裁田の山者黄(もみぢ)始め有り(二一九四)

ちくしとつくし

福岡県は筑紫(ちくし)と読まれるが、日本書紀・万葉集は「つくし」と読ませる。この違いを私は「千の串」と「すぎなの子(つくし)」の違いと考える。実は魏志倭人伝に次の文章がある。

「女王国より以北に特に一大率を置き、検察せしむ。諸国之を畏憚す。常に伊都国に治す。国中に於いて刺史如き有り。王の使を遣わし京都・帯方郡・諸韓国に詣らしめ、郡の倭国に使するに及ぶや、皆津に臨みて捜露す。伝送の文書・賜遣の物、女王に詣るに、差錯するを得ざらしむ。」

一大率の一大は一大国＝壱岐国のこと。したがって倭国を統括するのが壱岐国。その壱岐島を地図で見ると、まさに「千の串」＝ちくしの姿をしている。だからもともと筑紫(千の串)は壱岐島のことと考えられる。

そして宗像も壱岐島の影響が大きい。宗像大社の主神が壱岐出身の御手長神。鐘崎織幡神社の宮司が壱岐氏。しかも日本書紀に吉備(壱岐)の軍勢がたびたび現れる。その宗像を代表する二つの神社が存在する地に、鐘崎と草崎の二つの岬がある。この二つの岬を「つくし」ととらえ、宗像を「つくし」と読んだと想像する。以上、広幡の勝手な妄想である。

博多湾→宗像→出雲の考古学的証拠物件

日本の古代の鉄生産について詳しい奥野正男氏(元宮崎公立大学教授・故人)が二〇一〇年に著書『邪馬台国はここだ』で、熔解温度が九百度前後と低い砂鉄(チタン含有率の低い砂鉄)は日本の中で博多湾岸・宗像・島根県斐伊川流域の三つしかないと報告。しかも「千度以下の温度だと半還元状の鉄塊となり、これを加熱・鍛打して純鉄を作る鍛鉄作業を必要とする。だがこの方法だと弥生土器を焼いた温度四百～八百度でも可能になるので、弥生時代から日本で鉄が造られたと言える」と記している。

その本が紹介する資料を添付する。

なお応神記に「韓鍛、卓素」とあり、鉄生産を専業とする集団が韓半島から渡ってきたことが記される。ただし博多湾岸・高祖神社(糸島郡前原町怡土字高祖)に「筑前怡土郡一宮託祖大菩薩」の棟札があるので、糸島経由である。製鉄集団「タク」は、対馬では式内社「天神多久頭多麻命神社」「多久頭神社」があり、出雲には式内社「多久神社」がある。

仙台市　　広幡　文

表７　全国主要産地の砂鉄中のチタン含有比（長谷川熊彦『わが国古代製鉄と日本刀』『未利用鉄資源』通産省 1959 年による）

産　　地	全鉄分	チタン	鉄分中のチタン含有率	注
福岡県糸島郡北崎海岸	**67.24**	**0.78**	**1.16%**	
鹿児島県種子島安城金浜	33.16	6.04	18.24	
〃　薩摩郡内	56.34	9.14	16.22	
青森県下北郡地内	57.59	6.23	10.82	国見山鉱業採掘
〃　〃	26.84	1.66	6.18	
〃　〃岩屋海岸	45.09	9.92	21.62	
岩手県九戸郡大野・水沢	42.89	7.21	16.81	川崎製鉄採掘
島根県飯石郡吉田村原	58.28	8.49	14.58	近世鉄穴跡
〃　〃　菅谷	57.78	5.95	10.30	〃
〃　**斐伊川流域横田**	**63.72**	**1.13**	**1.77**	個人採掘
〃　**阿井村**	**63.01**	**1.47**	**2.33**	
〃　能義郡布部村布部	50.66	9.11	17.98	
鳥取県蝮波	58.03	5.40	9.30	
〃　日野郡	61.90	4.34	7.01	
〃　福威山	62.40	5.02	8.02	
秋田県八郎潟金畑	31.33	13.37	42.67	川鉄鉱業採掘
茨城県西茨城郡友部	42.61	13.42	31.49	塚本友部鉱山
千葉県市原市加茂	7.94	0.40	5.03	
〃　君津市大佐和海岸	41.61	9.43	26.86	
神奈川県三浦半島金田湾	49.24	11.19	22.72	カネヤス鉱業
奈良県山辺郡山添村	21.3	29.9	140.0	チタン砂鉄鉱
広島県比婆郡	60.42	5.79	9.58	
〃	52.27	5.37	10.27	
岡山県吉野川	41.24	3.72	9.02	
〃　吉井川	65.72	2.71	4.12	

表８　九州地方の砂鉄中のチタン含有比

産　　地	全鉄分	チタン	鉄分中のチタン含有率
糸島郡北崎海岸	67.24	0.78	1.16
〃　糸島郡内	68.22	0.83	1.22
福岡市大原海岸	63.0	1.03	1.16
宗像郡向山海岸	69.0	0.94	1.36
〃　恋の浦海岸	52.0	9.0	17.38
北九州市脇田海岸	54.0	17.0	31.11
大分県佐井川河口	56.0	16.0	28.57
〃　駅館川河口	55.0	12.0	21.81
〃　大分平野西南部	58.0	12.0	20.69
宮崎県日向住吉海岸	34.64	7.1	20.49
〃	46.83	9.25	19.75
鹿児島県種子島	33.16	6.04	18.24
〃　薩摩半島	56.34	9.14	16.22

